

## 講演会・全体会午前の部

**司会者** ただ今より、講演会ならびに全体会午前の部を行いたいと思います。午前の部の司会を担当します藍住中学校1年のg、藍住中学校1年のhです。よろしくをお願いします。それでは、早速、講演会に移りたいと思います。パネリストは上嶋桃華さん、大澤加奈さん、コーディネーターは吉成正士さんです。どうぞよろしくお願いします。



**吉成** 皆さん、どうもこんにちは。去年に引き続き、ここでコーディネートをしていく吉成です。今日は2人の女性のパネリストをお招きしました。香川県の小豆島からお2人をお招きしました。この後、お2人から20分ずつぐらい、お話をしてもらいます。

それに先だって、私の方からちょっとお話というか、紹介をさせてもらおうと思うんですが、座ってお話をさせてもらいます。(本を手にする)、宣伝ですけど、宣伝って言うても1年半経つんですけども、小説ですね。『PM (ペットボトルマジック)』って、去年も紹介させてもらったと思うんですけども、なぜ、これを書こうと思ったかって、いろいろいきさつはあるんですけども、最終ね、中学生

に読んでほしい人権に関わる小説を書きたかったんですよ。もう「人権」っていうのでは読めないんで、人権のにおいのするような、そういう小説を書いてみたかったんです。こういうのが見当たれば、自分が書く必要はなかったんで、書きはしなかったんですけども、そういうのがあんまり見当たらなかったんで、書いてみました。特に、本の苦手な子。本の苦手な子ってどれぐらいいる。中学生で。活字ばかりの本が苦手な子。わりかし少ないよな。結構すばらしいですね、皆さん。でも、今、手を挙げてもらった中に、実は私も入るんですよ。本、苦手なの、すごい。だから、今、頑張ってる、1年生の子から借りた、『カゲロウデイズ』読んでるの、今。頑張ってるの、今。で、今、本の苦手な子にも読みやすいようにっていうのでね、人権に関わる本を書いてみました。字も大きいです。行数も少なくってね、行間も大きいです。読みやすく書いてみました。

実はね、この本を書いたという縁があって、去年、8月に毎年行われている「鳴門市人権フォーラム」っていうのがあるんですけども、そこでお話をさせてもらいました。でね、実は今年もやります。8月の8日。金曜日のお昼から、「鳴門市人権フォーラム」っていうのをやります。出ます。今回は、この中学生集会に携わってきた人間としてお話をさせてもらおうと思っています。こんな感じで、その人権フォーラムをスタートしていくんですけども、今回は若い女性お2人にお話をしてもらおうんですけども、その8月8日の人権フォーラムには3人大人が、私も含めて3人大人が前に立ちます。その3人の内の、一人はね、はい、藤原先生、起立。藤原先生にもね、お話をいただきます。その時はよろしくお願いします。

ます。それからね、鳥取から佐伯さんっていう、PTAの人権教育活動に携わってきた佐伯さんっていう方にもお話をいただくようになるようです。それと、もう一人、私からもこの中学生集会のことに、お話をさせてもらいます。そのチラシ、今日は昼休みに配られるようですけども、そのビラの裏側に書いてある文章を、ちょっと読ませていただきながら、この会の成り立ちについて、ちょっとお話をさせていただきますので、お願いします。それじゃあ、いきますね。

『中学生の中学生による中学生のための「人権を語り合う中学生交流集会」。19年前。』19年前です。『「人権を語り合う中学生交流集会」は「徳島県学習会中学生集会」として立ちあがりました。それは、県内各地で開かれていた同和対象地区学習会に参加する中学生が結集することをねらいとしました。学習会は、部落差別をはじめとして、あらゆる差別をなくそうとする仲間が集い、学び合う場所でした。しかし、1つの学年で50人を超える同和地区の仲間がいる中学校がある一方で、全校でたった3人だけの仲間で行っている中学校もありました。中学生にとって、仲間の存在は、大きな力となります。そんな中学生の中に培われてきた部落差別解消への願いを結集するため、「徳島県学習会中学生集会」は、スタートしたのです。時は流れ、法切れ後、同和対象地区学習会はなくなってしまいましたが、それでも本会は、名称や内容を変えつつも、本来のねらいは見失うことなく、今年で19回目を開催します。いじめの厳しい現実が語られたこともありました。生々しい部落差別の現実が突きつけられたこともありました。それでも中学生は、今、自分にできることを自問自答しながら、学校や学年

の壁を越え、言葉を返し、思いをつないでいきました。そのひたむきな姿は、毎年、会の終了後、参加者全員に共通な形として集約されます。「笑顔」という結晶で…。』



と、紹介文を書いてみました。この会は部落差別をなくそうっていう強い願いの中でスタートしたんです。もしかすると中学生の中には、「部落差別とか身の周りとかにないよ。聞いたこともないよ。」そういう中学生もいるのかもしれませんが。どちらかと言えば、見えやすい差別問題ばかりに目が奪われがちかもしれません。だけど、あるんですよ。あります。私はいつも思ってます。この学習は、皆さん予防接種とかするでしょ。インフルエンザにかからないためとか、予防接種するじゃないですか。そしたら、もしかかっても免疫力があるから抵抗すること、対抗することができると思うんです。この学習もそうだと思うんです。今の間に、もし将来いろんな差別問題に出会いぶつかったとしても、きちっと正しいことを知っていて、それに対抗、抵抗できるような力を自分の体の中に入れておく。そういうのが、この学習だと思うのです。だから、知らなかったら皆さん、どうですか。巻き込まれたりしないですか。病気なんかもそうでしょ。免疫力がなかったりすると、かかっちゃたり

とか、重症じゃないや、重い病気になってしまったりとかもすると思うんですよ。そうならないためにね、学習をしているんだと思います。今からお2人の女性の方から、部落差別のこともそうなんですけども、それ以外のいろんな人権課題についてお話をさせていただきます。もしかすると中学生の皆さんには、「あっ、それ、あたしと一緒に。」って思う人もいるかもしれません。「あっ、俺の家の中にあることと一緒に、今、話してくれたなあ。」って思うかもしれません。そんなことをしっかりと受け止めながら、お2人の話を聞いた後、皆さんから感想とか、質問とか、意見とか、述べていてもらいたいと思います。そうしていくことが、恐らくはお互いの力を高めていくことになっていくんだと思います。よろしくをお願いします。

それじゃあ、ずいぶんと長い前振りになってしまいましたが、お話をいただきたいと思いますが、大澤さんと上嶋さんです。お一人ずつお話をうかがいますので、まずは大澤さんからいきましょか。拍手でお話を聞きたいと思います。よろしくをお願いします。



**大澤さん** こんにちは。香川県の小豆島から来た大澤です。今日は中学生の前でお話しさせていただける機会を与えてもら

ったので、自分が活動、部落差別の問題とかのいろいろな活動をしてきた中で、やっぱり一番胸につかえるというか、一番身近な存在の家族との出来事というか、家族と自分が、こうやって部落問題を勉強していくなかで、葛藤というか、そういうことをお話しできたらいいなと思います。私の家族は、自分が中学校1年生の時に離婚してしまった。離婚してしまったと言うのもおかしいけど、離婚したので、今は家にお父さんと弟だけで、しています。お母さんは、違う人とどっかで、小豆島の中なんですけど一緒にいるんです。けど、やっぱり、いざお母さんってなったら部落差別の話とか人権問題とかについて話すことは、ほんまに腹割ってせな、お母さんとはまだ自分も話をようせんし、自分もお父さんの家の方によく帰ったりするので、お父さんとは話が…、まあ、そのお父さんなんですけど、自分が部落差別とか様々な人権問題のこういうフロアの方に行くようになったのも、中学校の先生に誘われて行くようになった訳なんです。そんな時は、やっぱり中学校の先生が誘ってくれてるっていうだけやから、親も「行ってこい。」「どうぞ行ってきなさい。」っていうけど、高校になって自分から「今日はこういう活動があるから、どこどこ行ってくるわ。」とか「今日は、ちょっと前で行わなあかんから、ちょっと行ってくるわ。」みたいなことを親父にしか言わんけど、親父にこう言ったら、やっぱり親父が小豆島の地区出身っていうのもあって、何か親父もまだつかえてる部分があるんやと思うんですけど、いまだに。何て言うんだらう。「勝手に行ってこい。」とか、中学生の、自分が中学生の時分は先生にプリント渡されて、「ちょっと親に結婚差別のこと聞いてきて。」って。

『子が部落の人と結婚する』というのを言われたら、親はどう言うか、ちょっと聞いてきてくれんか。」っていう時に、親父に「ちょっと、これ。」って、「プリント渡されたから見てくれ。」って渡したら、「はい。」って投げられたんです。そういうのも何か、今考えたら、自分も、こっちも親父にそういう態度取られたらすごいしんどいけど、親父もうちにそういうプリントを渡されたり、「こういう活動行ってくるわ。」とか言われたりしたら、ほんま、つかえるというか、「俺はそんなん考えたくないのにな。」みたいな人なんで、まだしんどいんかなっていうのはあります。でも、そんな親やけど、自分はここ数年親元を離れて一人暮らしもしてるんで、こういう活動をしているっていうのは薄々知ってるけど、実家に帰った時にも、こういう話は触れずに、こういう話をするのはお祖母ちゃんとか親戚の人とかだけで、全然親父はかんできてない感じです。でも、やっぱり自分としたら一番こういう、「今日、徳島行って中学生の前でこんなことしゃべってきたんや。」って、「こういう反応あったで」って言いたいんは、やっぱり親父やし、親父が死ぬまでに絶対に自分の活動を認めてほしい、認めてほしいじゃないけど、「おお、頑張ってるってこい。」って一番言ってほしいんが親父かな、と最近切実に、けんかしながらやけど、思うようになってきてます。

家族のこと、親父はそんなんありながら、うまいこと話とかはしているんですけど、一番自分が家族、家のことで衝撃やったことって、5年ぐらい前にひいお祖父ちゃんが亡くなって。ひいお祖父ちゃんは漁師しよったんです。その漁師、漁師やけん、魚売る時に伝票とか書っきよったらしいんですけど、自分もほんま

に後悔しとる話で、それも後から聞いた話、ひいお祖父ちゃんは伝票も読まれへんし、字も書かれへん。その地区に、結構大きな地区やけん、学校はあったんやけど、家のお金のためにお祖父ちゃんは漁師に行って、みたいなの。で、お祖父ちゃんが死んだ後にお祖母ちゃんから



「そうや、お前、知っとったか。祖父ちゃん、字、読まれへんかった、書かれへんかったんやで。」って。そこで、ちょっとこう、何やろ、いろんな前で話してくれとった人と、何やろな、大きな衝撃じゃないけど、「ああ、きたー。」みたいな、遅いけど「きたー。」みたいな。「うちの家族にもやっぱりそういうのがあったんか。」みたいな、がやっぱりありました。その地区では識字学級があったらしいですが、今は、多分その地区ではやってないですね、識字学級とか。外国人も結構おるので、その方々も文字読めるようにとか、文字書けるようにしようとか、みたいな取り組みは全然やってない

と思うんです。ちょっと自分も地元に戻って、最近の話ですけども、今自分がこう活動してるからとかじゃなくて、文字を読まれへん、書かれへんっていうのは、ちょっとおかしいというか、自分らも不便。何やろね、何て言ったらいいんかわかんけど、文字書けるようになってほしい。読めるようになってほしいし、また、それで、読めるようになったり書けるようになったりしたら、友達も仲間も増えていくやろうし、「こういうの、ちょっとやってみいひん。」って、隣保館とか会館の人に訴えて、話には行ってみたんですけども、「今、そんなやっとなる場合じゃないんや。そんなんはお金いるし、あんた一人の力だけでできる訳じゃない。」って。そうやって返された時に、ちょっと自分の力が情けなくなっただけっていうか。何やろな、この人らはどこに目標を置いて部落差別というか、その地区は部落やのに、部落やのについていうか、部落っていう地区で生まれ育って頑張って仕事やってしとるし、何で、そこに自分らとか会館とか隣保館とかの人がもっと手助けして、もっといい町にできひんのかな、っていうのとかもあって、ちょっと最近は悩みもあったりするんですけど。

でも、やっぱりこうやって中学生の前でしゃべらしてもらったりしたら、自分が中学校時代のことも思い出せるし、あの時ああやったんだとか、あの時先生こんなん言よったけど親父はどうやったんだろうな、とかを考えたりしたんですけども。この話をいただいた後に親父にすぐに話にいったんですけども、やっぱり「ふーん。勝手にどうぞ。」みたいな、「俺関係ない。わし関係ない。勝手にお前が行きたい時に行けや。」はあ、まだこんなんかあ。たぶん、この親父との関係は、

親父が死ぬまでこんな関係でやっていかなあかんのかなっていうのが、今の一番の悩みっていうか。活動していく中で自分が何かにつかえて活動するのは、自分も踏ん切りがつかんし、最後にそこが親父に「頑張ってこい。行ってこい。」って言われるのが一番うれしいし、一番来て、ああ、よかったなあって思えるように、なれるように。これからはまた中学生と一緒に、これからもずっとつながっていけとったら、どこかで会ってこういう話できたらいいかなって思ってます。ありがとうございました。



**吉成** ありがとうございました。あの、続いてと言いたいところですけど、ちょっと言葉挟むとね、みんな、あそこのパネル、誰か読んでくれた人おるかな。右側のね、赤のやつとかピンクのやつとか、紺のパネル。あれ、識字学級の紹介のパネルなんですよ。識字学級って、どう、わかる。学習した中学生ってどれぐらいいる。識字学級の学習したことある人、はい。うーん、なるほど。わかりました。識字学級っていうことについての学習もしてみるといいかもしれないな。部落問題の学習をしていく時に、必ずといっていいほど出てくるのが、識字学級のことについてなんです。これは、別に日本だけ、部落差別にだけ関してあるわけじ

やなくてね、世界的な問題でもあるわけなんです。要するに、日本国外においても大きな問題の1つでもあるわけです。要するに文字を知らない、書けない、読めないがために、自分の仕事に限られてくる、となってくると、収入にも関わってくる。そうなってくると、子育てとか自分の食べ物とか経済にも関わってきて、それが、やがて差別にもつながっていく可能性がある。そういう問題でね、識字学級の問題っていうのは、すごく勉強する価値があるっていうか、勉強した方がいい事柄なんで、せっかくあそこにあるし、ここでもやってるんですよ、識字学級。この会館で。ここでやってるの。私、行ったことないから偉そうなこと言えんのやけども、あそこ読んでみるとね、地元とか、この近隣の小学生とも識字学級に通っている方は交流しているというふうに書いてありますので、よければね、みなさん、せっかくの機会ですから、学習だと思って空いてる時間に見てもらえるといいかなと思います。また、それに先ほど手を挙げてもらった皆さん、さっき手を挙げてもらった皆さんなんかはね、また後でものを言ってくれとありがたいかな、「こんな学習したよ。」とか「こんな交流があったよ。」とかお話ししてくれるとありがたいです。それから、また、後で皆さんには感想とか言ってもらおうとは思いますが、上嶋さん、いきましょか。突っ込みたい所もまだあるんですけども、それは後ほどということで。続いて上嶋さんにお話しをいただきたいと思います。皆さん、さっきのね、言いたいこと、頭の中に置いといてね。忘れないように。発表したいこと、置いといてね。では、もう一方の上嶋さんのお話を聞きたいと思います。拍手をお願いします。

上嶋さん 皆さん、こんにちは。ちょっと疲れたと思うんですけども、最後なんで聞いてもらえればと思います。私がこの勉強をするきっかけになり、今している理由が2つあります。今だから言えることで、私が中学校の時はそれに必死すぎて全然言えなかったことなんですけど。まず、私が小学校5年生の時に、お母さんが再婚をして、その再婚の相手がお父さんなんですけど、そのお父さんが部落の人っていうこと。お母さんに小学校5年生の時に、再婚する1か月ぐらい前に、「今度、結婚しようと思ってる人が部落の人なんやけど、いい。」って



聞かれて。でも、小学校5年生の時に、私も全然興味がなかったから、全然わからなくて、「部落って何。」って聞いたら、車とかで、実際、お父さんが住んでいる地区に行って、「ここの通りの人らは怖いとか言われとるんや。」とか、「猫ひいたら、なんかみんな来る。」みたいな感じのことを聞いて。でも、私、その時に、

もうそんなない、と思っと思ったし、自分自身聞いたことがなかったから、「ああ、いいよ。」って言って。で、結婚したんですけども。結婚するまでにも、私の、私から言うたらお祖母ちゃんやお祖父ちゃん、お母さん側のお父さんお母さんが、すごい結婚に反対していて。「部落の人やからあかん。」とかって言われてたんですけども、お父さんの人柄を見て「いいよ。」って言ってきて。でも、付き合うのはお父さんのお母さんとお父さんまで。「それ以降の親戚関係は持つな。」って言われてて。今となっては、そんなことは言わないんですけども、そういう部落っていう思い込みがそこまでギスギスしていて、私もそれに、いち早く気づけばよかったんですけど、全然小学校の段階でそんなことにも気づけず、気づいたら結婚してたっていう感じで。で、そのまま中学校にあがりました。

中学校2年生の時に、同級生が書いた人権の作文が全国で賞を取って。それを学校で読んで私が書いた感想文に、「私は部落です。でも、差別受けたことないんで大丈夫です。」みたいなことを書いて、担任の先生に提出をして。そしたら、その後に先生方に呼ばれて、「自分が部落っていうことをいつ知ったか。」とかっていうことを聞かれて、「よかったら夏に徳島で中学生集会があるから行ってみんな。」と言われて、中学校2年生の時に初めてみんなと同じようにここに参加しました。その時に講師の先生が言ったことなんですけど、「自分が100円の価値のあることを話したら、必ずフロアからは同じくらいその子が持つと同じくらいの価値のものを返してくれる。自分が10円ぐらいのものしか言わなかったら、同じくらいのことしか返してくれん。」って。「自分が全部出すから、み

んなもそれぐらい出して返してくれる。」って聞いて、ああ、すごいなあって思った。私が本当に変わったきっかけっていうのが、この本当に中学生のこの集会で。そこからもっとやっていかなあかんと思って、今やっている状態です。中学校3年生の時に、いっぱい人権の勉強もして友達ともすごい泣きながらしゃべって、クラスで最初に「私は部落です。」っていうのを、立場宣言をしたら、もうその時、私もすごい泣いてて、その授業1時間、その後の休憩時間もずっと泣いてて。でも、その時に友達が「ほんなん関係ない。」とか、でも、ある子は「私、実は知っと思った。」とか、小豆島ってちっちゃいから、言ったら名字でわかるんですよ。名字であの子部落の子、部落の子じゃないっていうのがわかるから、「知っと思った。お母さんが今度再婚する相手が部落って言よった。」とか。それを聞いた時、なんや、知っと思ったんかと思っただんですけども。でも、このクラスの子



らがおったら大丈夫やと思って、2回目の立場宣言を土庄町の人権フェスタっていうのがあって、そこでしたんですけど。その時ももちろん泣いたんですけど、クラスの時ほどは泣かなくて、やっぱ誰かが近くにおるっていうのがすごい安心感があったんだと思うんですけど。そこで言って、そしたら、他のクラスの子も返

してくれた。その、「関係ない。」とか「そんなことを考えんでも大丈夫。私らは友達や。」って言うてくれたんやけども、その中で一人の友達が言ったのが、「部落の人が自分のことを泣きながら部落って言わんといけんこの世界、この世の中が変や。」っていう風に言うてくれて。それが、すごいうれしくて、そういう意見を持ってきてる子もいるんやなと思っただけ。私が泣きすぎてたっというのもあるんですけど。確かに言わないといけない世の中は変かもしれないんですけども、言わないと始まらないので、だから、私もこうやってずっと続けてきて、いろんな人にも出会って、私、今だから言うんですけども、あの時、宣言しとってよかったです。あの時してなかつたら、私は今ここにいないかもしれないなと思います。

それともう1つあったのが、私の妹のことなんですけども、妹が今2人いて、一人、真ん中が高校2年生で3歳差の妹と、今度その下が12歳差で、新しいお父さんとの間に生まれた子どもなんです。で、真ん中の妹なんですけど、知的障がいがあって、今、高松にある養護学校っていうところに通ってます。私、めっちゃ嫌いで、その子のことが、小学校の時からすごいけんかしてて。もう何を言ってもわかってくれん、どんだけ「こうして。こうしろ。」って言うてるのに、それをしない。頭が悪い。もうそれですごい腹が立って、めちゃくちゃけんかしてたんですよ。中学校の時に初めて、その知的障がいを、小学校5・6年だったかな、知的障がいがこの子にはあるかもしれないってなった時に、あつても関係ないって思ったのが実はそう。普通言った事ぐらいわかるやろう、って思ってた。部落のことやっただけで、部落って地

区で差別されよんやっただけで、そのことが理解できないから伝えられなくて。それにも腹が立って、すごいけんかとかもして。いざ、その子が養護学校に行くと、私もその子の学校の運動会とか、この間水泳の大会とかもあつたんですけど、そういうのを見に行くようになったんで、やっぱり、障がいのある子たちがおるから、運動会によつても参加できな



い子、なかなか参加しても競技が進まなかったりとかもするんですけど、それを一生懸命応援する子らを見て、私がすごい情けないことをしてたんやなって感じて。この子たちの中で、ものすごく頑張ってた、私の妹も理解しようとしてすごく頑張ってたかもしれないけど、それをわかってあげられず、私の感覚で、私の普通の基準でその子を見てしまったことがすごいショックで。その友達は、小豆島の子は知ってるんですけど、私の会社の人とかに「妹はどこの学校に行きよん。」って言われた時に、私、ずっと「養護学校」って言うのが言えなくて、普通の高校生、みんな的には普通の高校生しよんやろうなって思ってる。でも、私が「養護学校」って言うのが言えなくて、その言えない自分がすごい悔しくて。この間、水泳の大会を見に行った時に、この子たちのことを差別しよる自分がおるって考えて、すごいそれが辛くて、絶対言っ

やろうと思って、会社の人に聞かれた時に、「私の妹、養護学校に行ってます。」っていう風に、やっと胸を張って言えて。そしたら、その人は全然気にすることなくて、「ああ、そうなんや。そこの学校やろ。」って言うてくれて。私が勝手に怖がっただけで、その人は全然責めることもなかった。だから、私が勝手に周りの人を見て、妹のことを差別してたというのを最近すごい気づいて。その子からしたら、障がいていう差別と部落っていう差別の2つの差別を受けることになる。そうなった時に、私はその子に何をしてあげられるかって考えて、まだ答えは出てないんですけど、それを考えている途中です。もう一人いる12歳下の子は、正真正銘部落で生まれて部落で育



ってます。だから、まだ小学校2年生なんです、説明はできてないんですけども、もし、その子が実際結婚とかになったとき、今後、差別を受ける時に私がどうやって支えられてあげるか、妹も一緒なんですけども、どっちも支えてあげたいと思うし、その子たちがもし、差別を受け時に、私に相談してくれるような関係に、一緒に考えていけるような関係になりたいと思って。これが、私の1つの人権の目標です。それで、そうなった時に、その下の妹は部落で生まれて部落で育ったんですけど、私自身は結局部落なんか、

部落じゃないんか、って話になった時に、皆さん、どう思いますか。私、親が再婚して部落になったと思ってるんですけど、私って部落やと思いますか、思いませんか。なんか私、私自身は親が再婚したから部落やと思ってたんですよ。でも友達が「あんた、でも、生まれた時は」旧姓石井なんですけども、「石井やったし、部落じゃないやん。親が再婚して部落になったやろ。でも、血つながってないから部落ちゃうやん。」って言われたんですけど。血つながってないから部落じゃない。確かにそうかもしれないんですけど、周りから見たら、そこに住んでるっていうことは、イコール、部落なんですよ。ってことは、私はそこに住んでるんで、部落。でも、血はつながってないから部落じゃない。そんなのがよくわかんなくて、本当に根拠がなくて。でも、私がどっちかな、どっちでもいいんですけど、なんかそういうあいまいな、適当な、血がつながってないか、つながってるかとか、住んでるところがどうかとか、もうどっちでもいいようなことで、そうやって言よんやなっていうのを、すごい感じて。まあ、どう思うかなんですけども。私自身は、部落じゃないって逃げてしまったら、人ごとになっちゃうので、私は部落やと思って。

自分の妹ももちろんそうやし、自分の親もそうなんで、自分が部落やと思って、今、集会とかに参加して、いろいろ勉強してるんですけど。でも、やっぱり大事やなっていうのは、私が本当にへこんだときに支えてくれる仲間がおるっていうことで。実は中学校の時に、「関係ないよ。」って言うてくれた子とは、もう特に連絡も取ってなくて。その集会、フォーラムで1回目、私が立場宣言して、次の年のフォーラムにはクラス30ちょっ

といたんですけれど、20人が集まったんですよ、声かけして。でも、その次の年、声かけして2人だったんですよ。もうそう思ったときに、もしかしたら、みんな高校生とかになったら部活とかもあるから、忙しいのはわかるんですけど、やっぱり何かしら連絡がほしかったって思ってる自分がいて。それ以降かな、私、その子たちに連絡取るのが怖くなって、もし言っても「もう、そんなん、ええわ。」って言われそうで、それが怖くて、全然今も連絡は取ってない状態で。今一緒に行きよる加奈ちゃんとか先生とかには、そういう話ができるのに、その時に支えてくれた子に対して、私、何も言えないんですよ。そういう関係性になってしまってる、私がやってるって感じなんかもしれないんですけど。今、こうやって集まっている中学生が、隣の子でも、どの学校の子でもいいんで、今後絶対つながれる子を誰か一人でも見つけといてほしくて。絶対一人はいないと、もう一人だけじゃ絶対できない勉強なので、これは。一人でも今後ずっと大人になっても連絡を取れるような、離れとつても、県が違っても連絡が取れるような相手っていうのを見つけてほしいなど、私は思います。

**吉成** ありがとうございます。すごいなって思いますね。2人とも、話を聞いていてね。何がすごかって思うかと言うとね、例えば大澤さんのね、亡くなったひいお祖父ちゃんにしてもそうですし、上嶋さんのお母さんにしてもそうなんですけども。別に、懸命に生きてるっていうか、誠実に生きてる。誠実に生きてるっていうこととか、当たり前のことを普通に当たり前でやってる。これってね、なかなかできないことだと思うんで

すよ。どうです、皆さん。当たり前なんだけども、実は当たり前のことが当たり前前にできないっていうことって、たくさんあるように思うんですよ。差別は駄目だとか、いけないってことは、それはわかっているんだけど、そのことをきっちり貫き通すっていうのはね、実はなかなかできない人が多くって。だけど、今の2人の話なんか聞いてると、そのことを普通に自然体でやってる、家族の中で生きてきたんだなっていう気がしてね。



それはすごく当たり前のことなんで、特段すごいと言う必要はないのかもしれないんだけど、だけど、なかなかそのことができないっていうことを考えると、すごいなっていう感じですね。実はしてほしいことなんです、フロアの中学生の皆さんにもちょっと聞かせてもらいたいんですけども。こういう、集会とか人権に関わる学習とか活動とか会とかに、行きたいなとか、行ってきたよとか、いうことを家族に、お話しをする時、話した時、お家の人がどんな反応をするのかなっていうの。これは中学生の皆さん、後でまた手を挙げてね。「よし。行ってこい。」と言ってくれるとうれしい訳よね。だけど、なかなかそうはならないっていう。まったくうちの家と同じです。だから、そんなにうつむくことでもないのかな。だけど、実際はどう。今も話し

てくれたんだけど、お父さんとの関係性を。「おお。頑張ってるっていい。」と言えるような関係になっていきたいっていうところやけども、何か付け加える言葉とかある。

**大澤さん** まあ、最終的なところは、親父にこうやって背中を押されて「頑張ってるっていい。」っていきたいのはあるんですけど。そんな、そのことで親父のことで、もうどないしよう、って悩むことはあんまり自分もないし、あったとしても、ほんまに中学校の時の先生とかに相談したりできてるので。そのことに関しては全然自分の中では、これは最終的な問題かなとか。今、どうこうできる問題ではないかなって。長い年月かけて、自分らの関係をうまいことやっていかなあかんのかなとは思ってるんは思ってるんですけど。



**吉成** いいな、その長い、長い時間を見通せるっていうのはいいね。私なんかせっかちなんでね、今日思ったら明日できなきゃ駄目、みたいなところがあるのよ。みんな、ない、そういうところ。今日思ったら明日できなきゃ駄目みたいなところがあってね、自分で自分の首を絞めるんだけど。いいね、そういうの。いや、上嶋さんなんかはどう。例えば、今日こ

こに来るとかってなったときに、お母さんなりお父さんなりっていうのは、どんな反応するのか。黙って来た、今日。内緒で来た。

**上嶋さん** 言いました。言いました。でも、親って一緒に住んでないんで、一応その、お父さんとお母さんとお母さん側のお祖父ちゃんお祖母ちゃんにも、一応言っただけです。中学生集会っていうのが、毎年、本当に5回か6回、ここに来させてもらってるんで、「徳島行ってくる。」って言ったら、「ああ、中学生の集会か。」ってわかってくれてるんですけど。まあ、「頑張ってるっていい。」っていう風には送り出してはくれるんですけど、お父さんはもう、何も、無言なんです。何も言わずに。一時、ものすごく「行ったり、発言したりするのをやめろ。」っていうのを言われてた時期もあったんですけど、最近あきらめたんか知らないんですけど、何もちょっと言ってくれなくなっちゃったっていうのもあって。お父さんからしたら、私は部落じゃないという風に思ってるのかもしれないんですけど。私もやっぱり親が違うんで、なかなか突っ込んだ話までできなくて。それがちょっと本当は本音で。本当の家族に親子にはなりきれてないんかなという風に思っています。

**吉成** いやー、そんな風に思ってくれると、父親としてはうれしいね。いや、自分が父親の立場として言ってるわけやけど。我が子にそんな風に思ってもらってるっていうのが、僕だったらうれしいけど。そんな風に思ってくれたら、何か応援してやろうみたいな。何てかわいいやつなんだろう、こいつは、みたいな、思っちゃうけど。みんなのお家の人と

の関係性なんかもね、後で話を聞かせてもらおうと思うんですけど。果たして自分は部落なのかどうなのかっていう。これは、今はお話聞かせてもらいましたけど、やっぱり悩ましいところですかね。どうなんですかね、これ。

**大澤さん** どうなんですかね。

**吉成** どうなんですかね、これ。

**大澤さん** まあ、でも、うーん。自分が、その部落であろうが部落でなかろうが、その人の見方で、見方がどうであろうが、この勉強が好きな、好きでこうやって来てんねんやから、2人ともな。好きで来てんねんやから、ずっとこう続けていたりして、いったらええと思うけど。その、部落、自分はある、何やら自分が部落出身やからこういう勉強してるって、あんまり思いたくない。思いたくないというか、自分がこの勉強が好きだからしてるみたいな風に思いたい。

**吉成** ああ、なるほど。

**大澤さん** だから、これもずっと長いこと、自分で考えて、考えて、考えぬかなあかんことやないかと思えますけどね。

**吉成** なるほど。それって、ほら、上嶋さんがね、さっき言った、後ろの席で「関係ない。」って言ってくれた友達かな、どっか似てるのかな。違うかな。ニュアンス、感じが。今、大澤さんは立場関係なく好きやから、好きやからここに来てるんやと。好きやからやってるんやと。だから、そういう学習が好きやからやってるんであって、立場とか関係あらへんという、そういうところでね、今は。そ

の感じと、その感覚と、後ろの子が「それ、関係ないよ。」と言ってくれたのかな、それはちょっと違うのかな、感じが。どうだろう。

**上嶋さん** どうなんですかね。わかんないんですけど、多分、私が「部落です。」って言ったことに対して、「それは部落とか関係なく仲良くしようよ。」という意味の「関係ないよ。」とかだとは思うんですけど。どうなんですかね。

**吉成** どうなんですかね。



**上嶋さん** 答えが出ないんですよ。でも、まあ、私のことを部落と見るか部落じゃないと見るか、もう相手の判断なんで。でも、私もラッキー、ラッキーという言い方は悪いんですけど、もし部落になったら、部落の立場やったら、じゃあ部落じゃなかったら、っていう両方の面から考えられるんで、私的にはすごい勝手な思い込みなんですけど、どっちの面からも考えることができるんかなっていう風に思っはいるんですけども。

**吉成** ああ、なるほど。両方の面から、自分を見ることができるという。なるほど。もしかすると、フロアの皆さんの中にも同じような思いでいる人もいるのかもし

れないですね。この後、みんなで話し合いをしていきながら、そういったところが少しずつ、より一層わかっていくと、お互いというか、みんなのためになっていくんじゃないかなと思うので。実は時間が、30分までなんですけど、今、35分ですか。一旦、マイクを司会のお2人に返したいと思います。どうぞ。

**司会者** どうもありがとうございました。それでは残りの時間、感想や質問、意見交換をしていきたいと思います。マイク係として、応神中学校2年の伊藤深高さん、応神中学校2年の藤永零さん、そして応神中学校2年の藤本淳史さんの3人がフロアをまわります。記録の関係上、発表者は団体名、学年、名前を言ってから発表してください。それではよろしくをお願いします。

**板野中学校 3年 d** 私は、上嶋さんが部落の人でも部落じゃない人でも、上嶋さんに対する接し方は何一つ変わらんとと思うから、安心してください。



**藍住中学校 3年 i** 今さっき、上嶋さんが、真ん中の妹さんが知的障がいがあるって言ってたんですけども、実は私の弟もそういう症状があつて。それで、話

を聞いていて、同じ人がいるんだな、と思って。私も小さいときからずっと一緒に弟と住んできたけど、やっぱりまわりの近所の人からも支えがあつたけど、引っ越しして来たってなつた時に、弟のことをいじめられるんじゃないかな、ってそういう不安があつたんですけど、そういうことを、いざ友達に言ってみると、別にそんな関係なくて、自分が差別していた、自分自身で弟のことを差別していたんだなと思つたので、上嶋さんみたいに、これからは堂々と弟のことを話せるようになろうと勇気をもらいました。

**藍住中学校 3年 j** さっきのiさんの言つたことに似てるんですけど、今まで誰にも言つてなかつたんですけど、私の弟がちょっと知的障がいがあつて。それがわかつたのが、去年で、去年、何か病院行つて、何か知的障がいがあつたことあるみたいなことを言われて。何か、その障がいがある子は、弟と同じ障がいの子は、クラスとか学校からいじめを受けやすいという特徴を持ってるらしくて。それ聞いたときに、今まで普通に接してきた弟なのに、ちょっと弟が違つて見えて。で、いじめられているというか、クラスとか学年からちょっと変な目で見られるっていうのを、弟から聞いたので。それで、私が弟に何ができるんだろうって考えよつたら、やっぱり何もできることが見あたらなくて。いじめてる子にいろいろ言わなあかんと思つてるんですけど、やっぱり言えなくて。iさんも言つたんですけど、やっぱり自分の弟のことをそういう目で見るのはよくないなと思って、これからは自分も弟にしてやれることを探していこうかなと思つました。

**藍住中学校 2年 b** さっき、jさんが弟のことを話しましたが、その弟さんと同じクラスなんです。学校は、小学校は違うかって、そのjさんの弟の存在を知ったのは、今年になってなんですけど。普通に接していて、何か全然気づかなかったんです。そんなことがあるっていうのも知らんかって、今聞いてちょっとびっくりした。びっくりしたっていうか、全然そういう風な感じが感じられなかったんで、ちょっとびっくりしました。実は、自分には弟が2人いるんですけど、一番下の今、小学2年の子がダウン症という障がいがあって。ちょっと重いらしくて、小学2年生なんですけど、IQっていう知能の発達の理解度とかがわかる数値が、数値だけで表しとるけん、何とも言えんのやけど、小学2年生なんやけど、年齢、頭の年齢が2歳くらいらしいんですよ。でも、言葉もいっぱい教えたらいっぱい話すし、だんだん覚えて、すごい覚えるのも早いし、かわいし、笑顔も素敵やし、障がいがあっても弟のことが大好きやし、しかも弟が障がいがあるっていうんもあって、自分も障がいについて勉強して、障がいのある子たちが集まる集まりとかに参加することもできて、いろんなことも知れたし、障がいがどういうものなのかっていうのもわかってきたような気がちょっとするし。別に障がいがあるけんって言って、普通に接することができんでも、友達としてでも接することはできると思うし、話も普通にできると思うから、何かあってもなくても同じっていうんはおかしいかもしれんけど、関係はないっていうか、「守っていく。」とか、さっきいろいろあったけど、それも1つあるとは思。これから先、どうなるかわからんけん、差別があると思うけど、そうなっても、もし辛

いことがあったとしても、自分は弟のことが好きだから、頑張って立ち向かっていこうと思います。

**応神中学校 2年 k** 今さっき、2人の人が「自分の弟に障がいがある。」というのを聞いたんですけど、私の家族で父親も心の病で障がいをかかえていて。それで、私はそのことを小学校3年の時まで知らなくて。それで、そのことについて、何で隠すんかな、って思ってたんですけど、大きくなるにつれて、そのことで差別を受けたりとかする人がおるらしくて、それで、そのことをずっと隠していたらしいんですけど。何でそんな病気とかだけで、病気にかかるととかだけで差別を受けるんかなって思いました。



**藍住中学校 1年 g** 私も兄弟とかじゃないんですけど、小学校低学年の時ぐらいに、知的障がいみたいな子と仲が良くって、その子と一緒に遊んでいたら、同じことを何回も繰り返してきたりするので、この子って何だろうな、って思ってたんですよ。知的障がいっていうのが、そのころわからなくて。それで、違う子と仲良くして、その子と遊ばなくなったんですけど、そんな時に、結構話しかけてくれたんですよ、その子が。その子が話しかけてくれたのに、あんまり、「うん。」

とかするぐらいのことしか言わなくて、結構その子、寂しい思いをしてたと思うんですよ。今、その子に悪いことしたなと思ってます。

**土庄中学校 3年 I** 大澤さんの話を聞いて、私がこの人権の集会に参加しようと思った時に、最初行きたいなと思って、親に話したら、母さんは「いいやん。行っておいで。」って言うてくれました。父さんは、船の仕事でなかなか家にいなくて、話聞いたりとかできなくて。大澤さんの話を聞いて、電話とかでも父さんと話とかして、もっと親と真剣に話しようかなと思いました。

**藍住中学校 1年 h** 私は、昨年、公文のキャンプに行って、その時知り合った友達から、先月ぐらいに手紙が来て。その友達の友達に障がいがあるから仲良くできるかわからんって相談が来て。私もどう返事していいかわからなかったけど、「仲良くやっていけるんだったら、やっていたらいいんじゃないか。」って返事を返したら、「やっぱり仲良くできんかもしれん。」って、また返ってきて。私も、その手紙の返事を見た時、もし障がいのある子と友達になったら、本当に仲良くなれないんじゃないかと思ってたけど、その子にもう一度返事を返したら、「話してみたら、やっぱり仲良くなれたし、私ももし障がいがある子と友達になっても仲良くなりたいと思うから、どんどん話かけていったらいいんじゃないか。」って返事が来ました。中学校に入って友達ができるかどうか不安だったし、いろんなことが不安だったけど、話しかけていけば、本当に大丈夫だったので、その友達の言う通りだったと思いました。

**応神中学校 3年 m** 私には6歳離れた妹がいるんですけども、その妹は生まれつきたくさんの病気を持って生まれてきて、重度の障がい児なんです。で、知的と身体、両方の障がいがあって、自分でしゃべることもできんし、ご飯を食べることもできん、座ったりすることもできんくて、ほぼ寝たきりの状態なんです。昔から入院とか繰り返しょったけん、いろいろ自分が我慢しなあかんかったこともあったりして、一時、「何で私がこんな思いせなあかんの。」って妹のこと、ちょっと嫌いやったことがあったんやけど。今、そんなこと全然ないんやけど、みんなの意見を聞いたりして、自分が前思ってたことはごっつい恥ずかしいことやと思えるようになったし、こんだけ同じ障がいがある兄弟がおることを知らんかったけん、こんな話するんも初めてやし、こんだけ同じ障がいがある子の兄弟の話聞いてよかったです。

**司会者** 後10分です。しっかりマイクをつなげてください。



**上嶋さん** すみません。横から失礼します。みんな、弟のこととか妹のことを、この場で話してくれてすごいうれしかったし、司会の2人も友達のことを本当に自

分のことのように考えてくれて、何かそれを聞いて、私の妹のことをそうやって言ってくれてるような感じがして、すごいうれしかったです。私が本当に最近気づいたことを、今、この中学校の段階で気づいてるってことが本当にすごいなと思います。また、後でちょっと話しかけに行くんでお願いします。

**板野中学校 3年 d** この後の作文でも読むんやけど、私の祖母ちゃんはある人権活動に対して、いい印象をもらってないというか、「そういう活動とかほんまに止めな。」と言われて。でも、何か、実際この活動続けてきよんを祖母ちゃんに言えてなくて。でも、大澤さんの話を聞いて、私は、何て言うんやろ、昨日の夕食会でもそうやし、何かすごい私にとったらすごい言葉では表せんけど、何か大きなものをもらってる気がして、この活動の中で。だから、今すぐにでも伝えたいんですよ、私がこうやって活動してきた中でどう変わったとか、ほんまにこの活動の大切さとか、私はこの活動を誇りに思ってるから。だから、家に帰って、またお祖母ちゃん家に行くと思うんです。また、何か言われるんは嫌やし、怖いけど、でも、私は、その祖母ちゃん家に行った時に伝えようっていう決心が、この2日間をついたので、伝えるだけ伝えて、また、今度は伝えるんが先やけん、最終的にはちゃんと認めてもらいたいなと思います。

**大澤さん** 帰ってお祖母ちゃんに話すんは、もうほんまにこの活動に来るより100倍ぐらいの力が必要になるかもしれんけど、また、そのお祖母ちゃんに話して、いろんなこと言われたって、自分が大きくなったっていうのは変わらない

し、自分の糧に、積み上げて、ちょっとずつやけど積み上げてきてるっていうのも変わらないから。自分も、もう親父と頑張るし。お祖母ちゃんと頑張る。

**藍住中学校 3年 j** 私の親は離婚して。4年生の時に離婚して、4年生の時に親が彼氏をつくって、その彼氏さんとずっと住んどったんですけど、ちょっと前に別れちゃったんですけど。で、その彼氏さんを、ほんまに父親みたいに思ってた。この活動に来ていることもちゃんと「行ってきな。」とは言ってくれなかったんですけど、ちゃんと母親も「行ってきな。」って送り出してくれよったんですけど。何回もした話なんですけども、夏休みにプール行く話をしよって、どこのプールか忘れたんですけども、「どこどこいいんちゃうん。」と言ったら、「そこのプール、部落やけん、止めとこ。」みたいなこと言われて。ああ、やっぱり、ちゃんと口では「行ってきな。」って言ってくれよるけど、思ってる中では、やっぱりええように思っていないのかなって思ってた。親に自分のしていることを認めてもらいたいっていうのもあったから、ちゃんとその場で話もしたんですけど、やっぱり大澤さんの話していただいたことに、ちょっと似てるなって思っていました。

**藍住中学校 3年 i** 私の家も、今年とか去年からずっと離婚調停中で、別居しているんですけど。それで、弟とかお姉ちゃんとかにも会えずにいて、それで、25日に久々にお姉ちゃんとか弟に会って。前まで一緒に住んでいて、お姉ちゃんとか弟とかの大切さに気づけなかった。なので、弟とか妹がいる人とか、お姉ちゃんとかお兄ちゃんがいる人は、も

う少しお兄ちゃんとかお姉ちゃんとか、兄弟のことを考えて、一緒に暮らしてほしいです。

**応神中学校 3年 f** 私は人権のことについて小学校、でも、学校の授業でやってるぐらいで、あんまり知らなくて。中1になっても、中高生の人権集会に行つて、それでも、あんまりわかんなくて。やっと中2で吉成先生に誘われてここで部落差別のこととか知ったんですけど。それで、家で、「今日は部活はなしで、中学生の人権交流集会に行く。」っていう話をした時に、親に「もう、部落差別とかないんじゃないか。」って言われたことがあるんですよ。「逆にそういうんが、部落差別を増やしていきょんじゃないか。」って言われたんですけど。やっぱり大澤さんみたいに、親との人権集会に行くっていうことについての話し合いついていうんか、あまりできてないんですよ。親は「部落差別がなかったら別に行かなくていいじゃないか。」って、そういうのを伝えたいんですよ。やっぱり思いをまだ言えない自分がいて。こういうのって、どうやって伝えたらいいんですかね。

**大澤さん** えーと、自分家の親父も、自分が中学校のとき、先生とが家に来てくれて、「今日から部落差別の勉強を授業の中でやっていきますけど、構いませんか。」というのを来てくれて。先生が帰った後に、ほんまに先生が帰った後に、「何でこんなん、学校でやってるの。もう、ないのに。何で。」みたいな、同じようなことを言われて。でも、そんな時は、面と向かっては言われへんけど、後ろ向きでぼそっと「あるからやってんねん。うっとうしいな。」みたいな、ちょっと

こう腹が立って、何かそれに。言ったら、それは二度と言ってこなくなったんですけど。でも、やっぱりそういう、何やろな、部落差別を勉強していく中で、一番関係を大事にせないかんのは親との関係かなと、最近は思ったりします。

**司会者** まだまだ発表はあると思いますが、このあたりで全体会午前の部を終らせていただきたいと思います。最後に、もう一度拍手をお願いします。さて、この後、昼食・休憩となります。お弁当を注文された団体は、お弁当の引き換えを行いますので、代表の方は1階の受付へお越してください。なお、基本的にお弁当は、この場所で食べてください。また、まだ名札をつけていない方は、名前がわからないので、この後、全体会場の後ろの席でつくり、必ずつけておいてください。それではお互いに交流し合いながら食事をし、お昼のひとときをお過ごしください。なお、午後の部の開始時刻は13時です。遅れないように、元の場所に集合してください。よろしくをお願いします。それでは、いったん解散してください。

